

# 戦時下の文化

1936年の二・二六事件、翌年の盧溝橋事件が起きるなど、この頃には国内外が次第に騒がしくなった。1930年代前半の社会主義・共産主義の弾圧と転向の増加と合わせ、文学界は1930年代後半に大きく変化した。従来の文学作品とは別に、転向の経験を描く転向文学、そして開戦中の日中戦争を描く戦争文学が登場した。

## ○戦時下の文化

### ●全体主義的な思想へ

日中戦争の開戦後、国体論・ナチズムの影響を受けた全体主義的な思想が主流となった。

⇒この思想は、東亜新秩序・大東亜共栄圏・統制経済などの論調を支えた。

◇国体論…天皇をいただく日本の国家体制の優秀性と永久性を主張する考え

◇ナチズム…個人よりも民族・国家の利益を優先し、対外侵略をおこなうナチスの思想

### ●文学界の変化

#### <昭和初期>

次の文学が、昭和初期の文学界の二大潮流であった。

①<sup>(1)</sup> \_\_\_\_\_ 文学…社会主義の立場から労働者の姿を描く作品

②<sup>(2)</sup> \_\_\_\_\_ 派…反自然主義の立場の文学で、特に感覚的表現を重視した一派  
…横光<sup>りいち</sup>利一の『日輪』、<sup>(3)</sup> \_\_\_\_\_ の『<sup>(4)</sup> \_\_\_\_\_』

#### <日中戦争の開戦後>

1930年代前半の社会主義の弾圧でプロレタリア文学は壊滅していき、また、日中戦争が開戦したことで、文学界には次のような文学が現れた。

<sup>(5)</sup> \_\_\_\_\_  
…従軍体験など戦争を主題とする作品  
…従軍体験を記録した<sup>(6)</sup> \_\_\_\_\_ の『<sup>(7)</sup> \_\_\_\_\_』、  
兵士の実態を描き発禁となった<sup>(8)</sup> \_\_\_\_\_ の『<sup>(9)</sup> \_\_\_\_\_』

文学活動による戦争協力をおこなう国策的文学者団体<sup>(10)</sup> \_\_\_\_\_ や、  
徳富蘇峰を会長とした文化人の国策協力団体<sup>(11)</sup> \_\_\_\_\_ が結成された。



図1 麦と兵隊



図2 石川達三

### ●教育

1941年、小学校が<sup>(12)</sup> \_\_\_\_\_ と改称され、「忠君愛国」の教育が推進された。

⇒朝鮮・台湾で神社参拝や日本語の使用を強制する同化政策<sup>(13)</sup> \_\_\_\_\_ がとられ、

また、朝鮮の人々の要求に応じて、姓名を日本式とする<sup>(14)</sup> \_\_\_\_\_ を届出させた。

◇<sup>(12)</sup> …国民全般が漏れなく学ぶことを教育することを強調

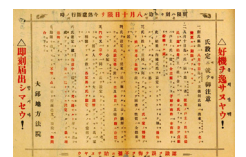


図5 創氏改名の案内

### 戦時下で創作を続けた画家—松本竣介

戦時下、画家もまた、軍部や内閣の意向に沿う作品を生み出した。しかし、松本竣介は「腹の底まで染みこんだ肉体化した絵しか描けぬ」と抵抗を続けた。右図「立てる像」には、暗い時代に両足で踏ん張って立つ青年が描かれている。これは松本の自画像とも見て取れる。

